

江青伝』の著者 ウィトケ女史に聞く 読売新聞』-1980.12.22

# 「江青伝」の著者 ウィトケ女史に聞く

判決間近に伝えられる四人組・林彪グループ裁判は、華国鋒・鄧小平の辞任説が流れるなかで、被乱党の中国政局ともからんで、一層注目されているが、その実態については不透明な部分が多い。読売新聞社には、この「アメリカの女流中国問題専門家」カーヌ・ウィトケ前ニューヨーク州立大准教授を訪ね、同裁判について意見を求めた。ウィトケ女史は七年に訪中し、全盛期の江青女史との長時間にわたる会見をもとに「江青伝」をまとめた。この「同書は」「江青女史が」ウィトケ女史との秘められた



浮世絵も飾ったニューヨーク郊外の自宅で語るウィトケ女史(島中特派員撮影)

## 四人組裁判 どういうシヨ

た生涯のすべてを語っていただいたことには、まさか彼女(江青)が今日の自分の姿を予想していたのではあるまいが、今となっては江青にとって唯一の救いであり、同時に中国現代史上の記念碑的な証言にもなった。(邦訳書の前書きで島中編者・東大大学院教授)との定評を得ている。それだけに、ニューヨーク市郊外のハドソン川を見下ろす自宅での二時間にわたるインタビューは不透明部分に光を当て、多くの示唆に富んでいる。

(聞き手・島中誠ニューヨーク特派員)

ロクサーヌ・ウィトケ(ROXANE WITKE) 前ニューヨーク州立大中国史准教授。スタンフォード、シカゴ、カリフォルニア大学を卒業。ハーバード大学東アジア研究センター、カリフォルニア大学現代中国研究センターなどで革命中国と現代中国社会の研究調査に従事。七年、約六週間にわたって中国を訪れた時、江青女史に繰り返したインタビューし、話題の書「江青伝」(COMRADE CHIANG)を書いた。現在は公職を離れ「中国の革命的な女性指導者たち」(一九三〇年代の上海)などの執筆に専念している。

「いわゆる、四人組、裁判を注意深く見守っておられると思うが？」

ウィトケ女史 テレビも見たし、中国側報道も丹念に見ています。とても面白く、興味津々の裁判といったところですが、実は裁判に關する論文をアトランティック誌のために執筆中だったので、私が、裁判が何度も遅れ、裁判の性格があまりにも不確実なので、執筆を遅らせているつもりです。

「あなたは中国に居られた時、江青夫人とはどんなにかお付き合いがあったか、あるいは、夫人にどこが変わったところが見られたらうか？」

ウィトケ女史 いくぶんか付き合いはしたけれど、傍聴はされ、自由を確保されたかもしないことを考慮に入れれば、とても元気そうに見える。張春橋や頭をさわられたほか、被告たちには手をつけていない。彼女たち(生監)のきりきりしたところ、彼女(ウィトケ)は打つてかきわけて、彼女は頭を生きていまして、手もつかない。

「中国の通信社は江青女史の態度は「むかつく」とか書いていますか……。」

ウィトケ女史 夫人は国家の最大の敵ですからね。それに通信社は、裁判にかけられている夫人を侮辱し続ける特権を与えられています。中国にはアメリカのような公正な裁判という概念はありません。(アメリカのような)世論を反映した政府は、裁判に対して偏見を持たないよう努め、陪審にも当該事件に偏見を持たない人を選びます。しかし、今回の裁判では、だれもが偏見を持っています。それが(中国の)方針であり、信条なのです。だから、中国の報道関係者が江青夫人の態度にはカムカすると言っているのは、夫人に、悔い改めるべき役割を与えたのに、悔い改めなかったからでしょう。

「公正な裁判」に疑問

「それは、スバリ今回の裁判を受け取っておられるか。」

ウィトケ女史 今回の裁判は、いっしょにすべきなのではないでしょうか。被告たちは四年間にわたる起訴、罪状選定の過程を通じて、政府や人民から悪口雑言を浴びせられ、すでに裁判を下されています。その罪状もテンテンバラバラに選ばれたもので、新たに加えられたものなどありません。一味がこうした状況下で公正な裁判を受けられないことは明らかです。なぜなら、世論は偏見でこら固まっているからです。そのうえ、十人の被告に対し三十五人の判事というのは全くおかしい。

「毛沢東主席に直接触れていないのも偽善的だし、おかしいことを浴びせられ、すでに裁判を下されています。政府と党は隠したが、テレビでも都合のいい場面しか放映していません。しかも、被告たちがどんな扱いを受けたのか、その辺の事情も不明です。確かに、黄永勝は、迫害容疑では有罪でしょう。しかし、迫害という点になれは、中国では何百万人も人が有罪です。これは国家全体の病でもあるし、国民性の問題でもあります。だから、被告たちは中国人であるというだけで非難されているともいえるのです。」

「公正な裁判」に疑問

「それは、スバリ今回の裁判を受け取っておられるか。」

「判決を持ち込むまで、いろいろと厄介な事態が起こるだろうか？」

ウィトケ女史 そうは言っていない。裁判は偽善的だと言っている。被告たちは国家と人民にもたらしたさいの災難の責任者であって、万死に値するところ、い

「判決を持ち込むまで、いろいろと厄介な事態が起こるだろうか？」

「判決は年内に決着がつくとの報道もあるが……。」

ウィトケ女史 それは推量の域を出ないでしょう。年内に終了するかもしれません。なぜ中国が年末までに終わらせたいか、よく分

「判決は年内に決着がつくとの報道もあるが……。」

私は拒否しました。

——あなたは中国を訪問した当時、夫人の「悪癖」にもう気づいておられたか？

権力樂しむ江青夫人

ウイトケ女史 いいえ、どの程度悪いことをしたの知りませんでした。突然ふつてわいた中国訪問に私は準備不足でした。当時、

私は中国を訪問した最初のアメリカ人の一人でしたが、まったくの一人旅で、他人から隔離されるという異常な環境に置かれました。

六週間半の旅行中、外国人にはただ一人会えませんでした。しかし、隔離されていたおかげで、私は中国側が押しつけようとしていた自己矛盾的な見解にもおちいらず、自分の考え方を打ち出すことが出来たのです。私は書記みたいなものでもした。夫人の言うままに何もかも書き取ったからです。

そんな状況でしたから、結果的には彼女の言ったことの意味をよく考える機会がほとんどなかったのです。

江青夫人はとっても力強く、かつ強情な人でした。そして女性であり、客を迎えた女主人であること、政治的権力者であること、を、両方とも楽しんでる風でした。夫人はその両者の間を行きつ戻りつしていました。夫人は夜おそくまで働いていました。私たちの対話も、午後おそくなってからやっと始まり、朝の三時か四時ごろに終わるのが普通でした。たいへんな精力家ですよ。

いま私は自分の書いた本を改めて読み始めていますが、権力闘争を続けてきた一人の人物として見れば、彼女の歴史はたいしたもの、と思っています。

インタビュの内容は英字紙「サ・デイリー・ヨミウリ」にも掲載されています。



MORNING WORLD

らしいものでもありません。

一年ほど前にアメリカで、ある中国政府高官と私の中国再訪について話し合ったことがありました。彼が言うには、中国人は私の本に悪い印象を持っているから、私が再び中国に入るのには難しいだろうとのことでした。どうも言い訳がましいので、私は「中国では私の本を読むのを禁じられているのだから、どうして中国の人が悪い印象を持っているのか」とずずねてみました。

彼は明らかに、この論理がよく理解出来なかつたようで、続けて「もし、あなたが、江青は権力を利用してために、この本に書いた材料を使った」という意味の声明を出してくれば、私たちもこれを公表し、中国内外で宣伝に使います。そうすれば、中国人の気持ちも変わり、悪い本だとは思わなくなるでしょう」と言いました。

この論理はおかしい。でもどうやら、

かります。やっかいなことを一つでも始末したいからです。憎悪ギャンペーンは四年間も続いていたし、今度の裁判自体も中国にとって膨大なエネルギーの浪費を強いるものでした。決して生産的なものではなく、それで車も自転車も作れるわけではないのです。

——裁判では毛主席のナゾめい行動とか、四人組との関係が明るみに出ると思うか。

ウイトケ女史 そんなことはないでしょう。毛沢東の声望は守られると思います。その二つの理由は鄧小平をはじめ、いまだに権力

# 開幕前から「審判」

## 中国の世論には先入観

の歴にある將軍、中高年層の名声を守るためです。彼らはみな毛沢東と結びついていました。毛沢東から「スケープノート」(身代わり)を探しているのです。

とにかく、裁判が毛沢東に関する重大なことを暴露するとは思えません。それははっきりしていません。ただし、毛沢東をこれら被告から切り離すことは非常に難しいことです。アメリカは政府も学者も、報道関係者もこの問題の本質